



追悼記念祭・ 誕生日パーティー スイス便り(4)

米川 泰弘

よねかわ・やすひろ

1939年、三重県生まれ。64年、京都大学医学部卒業。京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

「スイス便り」の季節が一巡した。文章を書く作業は毎日スケジュールに追われながら専門の臨床に明け暮れる私に、少し立ち止まり思索する機会を与えてくれた。最終回にあたって、記念祭や誕生日パーティーなどに参加した時に考え感じたことを記したい。

神経内科開講100年祭

本年初頭に、チューリッヒ大学病院神経内科開講100年祭が開催された。開設者はフォン・モナコフ教授である。彼は名前の示す通りロシア人であるが、当時の教授選において医学部教授会の推挙する第一候補はチューリッヒ州の文部大臣のお眼鏡にかなわず、かわって彼が教授として招聘されたのである。

私は学生の時、解剖学で重要な細胞神経の集まりである神経核を学んだ時、初めてモナコフ教授の名に接した。その名はまた、脳神経内科、脳神経外科領域でもよく知られている。例えば、脳血管の前脈絡動脈の閉塞によって起きる症状はモナコフ症候群と命名されている。障害側の反対側の片麻痺、それに多くは知覚低下および視野の障害(同名性半盲)を伴うものである。また、ディアスキーズスといって、脳のある箇所の障害がそこより遠いところにある箇所の機能障害をおこすことを提唱した。この現象は、最近のポジトロンCT(陽子コンピュータ断層撮影)によってもしばしば見られる、脳の循環代謝の異常所見を説明解釈するのに用いられる。が、100年後の今になってもこの現象の意義、成り立ちについて議論されていて、まだまだこれから研究が必要とされている。

当時モナコフ教授のもとには多くの日本人が留学生として訪れていて、故布施堤之助(東北大学教授)、故平沢興(京都大学教授、後に総長)などの大家がこちらで研究に従事された。布施先生のモナコフ教授との共著『脳延髄の解剖アトラス』は、大変卓越したものであることは知られている。また平沢興先生は私が京大に入学した時の総長で、当時その訓示を拝聴し感動したことを昨日のこのように覚えている。こうして、平沢先生の警咳に接した私がモナコフ教授の開講100年記念祭で、「脳神経外科の近未来について」の私見を講演さ

せて頂いたのは何という縁か、とも思った。また、100年とは長いようで短いものであるとも思った。

この会に合わせて、スイス神経内科学会機関紙にモナコフ教授についての特集号が出された。日本でこの方面に造詣の深い東京女子医大の岩田誠教授に一部お送りしたところ、丁寧なお礼の手紙をいただいた。彼は、師弟の系譜をたどると、モナコフ教授のひ孫弟子にあたられるとのことであった。お送りした出版物が、それを評価してもらえる人のもとに落ち着いたことを知って喜んだものである。彼の手紙の中で、ある人の仕事は、100年たって初めて正しい評価がなされるものであるとお言葉があったが、まさにその通りであると思った。

ところで、100年と言えばレントゲン博士がレントゲン線を発見したのも100年前であった。彼は、チューリッヒ大学と隣合わせにあるスイス連邦工科大学(ETHとよばれ、アインシュタイン博士を初め現在まで10数名のノーベル賞受賞者を輩出した名門)に1865年から1870年まで在籍し、後年のレントゲン線発見の基礎を培ったのである。つい最近その顕彰記念の行事もチューリッヒ大学病院放射線科・ETH・大学医学史博物館の三者共同で大々的に催されたところである。街を走る市電の車内や外装にも、レントゲン線発見の意義についての興味深いポスターが貼られて、一般市民の再認識を喚起していた。

クライエンビュール10回忌

モナコフ教授の記念祭から数カ月経って、4月にはチューリッヒ大学脳神経外科の開設者クライエンビュール教授の10回忌の追悼記念祭を私がお世話することになった。

クライエンビュール教授は数年英国で修練された後、この地に私財を投じて脳神経外科を開設され、スイス人の勤勉さで営々と今日のスイス脳神経外科の礎を築かれた。1973年に定年退官される前の3年間、私は一助手として直接その教えを賜った。臨床に当たった患者第一主義、専門医教育の厳しさなど、今思い返してみても、当時かけ出しの脳神経外科医であった私が、故教授から何と多くの大切な基本的な事からを学び取ることができたか、また、その日々がいかに充実したものであったかと、胸の熱くなる思いである。

故教授を偲ぶこの学術講演会の会場には大学の講堂をあてた。ここは、英国のチャーチル首相が第二次世界大戦後のヨーロッパの復興を若者たちに呼びかけたという由緒ある講堂で、歴史的保存建造物になっている。

ゲストとしては、もう引退された初期の弟子たち、現在世界のあちこちで活躍中の弟子たち、特に深い親交のあった英国のサイモン教授（前国際脳神経外科学会会長）、フランスのベルツイセ教授らをお招きした。故教授の後任者であるヤシャルギル教授は脳神経外科の手術用顕微鏡による手術形式を開発、全世界に普及された偉大な存在である。定年退官後アメリカに働き場所を得られた直後で、ちょうどスケジュールが合わずにやむなく欠席されたが、彼の講演原稿“Gentle individualism 穏やかな個人主義”は代読された。その中では、故クライエンビュール教授の、各人の人格を重んじた教育が讃えられ、聴衆に大きな感銘を与えたのである。

追悼祭は土曜日の午前中を利用して、講演にのみ興味ある人々には余り時間的に負担にならぬようにした。故人がチェロの演奏を趣味にされていたので、それを偲ぶ意味でプロのN女史（かつて東京音大で教鞭をとられたというスイス人）のチェロとその友人のピアノの伴奏によるシューベルトのソナタで始めていただき、会の終了はベートーベンのソナタで締めくくってもらった。このような会での音楽の生演奏は日本ではあまり一般的ではないが、こちらでは会での講演あるいはそれ以上の意味をもつものである。開会の辞はチューリッヒ大学学長にお願いし、講師の講演内容は出席者の多様さを考慮してできるだけ医師でない人にも理解できるようにお願いした。閉会の辞は医学部長にお願いし、滞りなく会を終えることができた。その後、もう少し旧交を温めたい人々のためには、約1時間半のアペロ（ワイン・ジュースなどの飲み物、ちょっとしたスナックなどをつまんでの談笑会）を同じ建物にある“Lichthof 光の館”で催した。これには、歴代の病棟婦長たち、秘書たち、コメディカルにも参加してもらって和やかな会となった。

この会を催すに当たっては、まず故人の親族クライエンビュール家の了解をえた。夫人も故人となられたが、ご家庭の主だった人々、お孫さんたちにも参加してもらった。たまたまお孫さんの一人が学生実習（医学部5回生）で、私どもの科で2カ月間研修をし、その間スタッフの一員ようになって働いてくれたものである。また、現在スウェーデンからオリバクロナ助手が一年の契約で研修に来ているのであるが、彼の祖父もストックホルム大学の著名な脳神経外科医の一人である。期せずして、ヨーロッパ脳神経外科の二大パイオニアのお孫さんが当科に籍を置いて働いているという状態になっていた。ここでも私どもが先代から教えてもらったものを、今度は私どもが正しい形で次代に引き渡さねばならないという責任を大きく感じるのである。

誕生日パーティーなど

これと前後して、何人かのスイスの知人の誕生日に招待された。いずれも20数年前にこちらで知り合った人々である。以前私どもの家主であったB女史はもう75歳になられた。長くチューリッヒ市内の区役所に勤めておられたが定年になってからは、200年ぐらい前に建てられたワイン造り農家を改造した

家を、いくつかの住まいに分けて賃貸しの管理をしておられる。当時から少し不自由であった目の問題を除いては健康で、毎年一回の海外旅行を楽しんでおられる。チューリッヒ湖畔のレストランに20人前後の親しい人々を招待し、和やかな雰囲気の中で、自分の誕生日を共に祝われたのである。また、還暦を迎えたS女史は、300程のマンションの持主で、一人でその管理をしている。チューリッヒ郊外の田舎町にある自宅で食前酒を振舞い、その後近くの町のレストランで、やはり20人ぐらいの人々を招待してその日を共に祝ってもらったのである。この2つの会ではそれぞれ主催者、つまり誕生日を迎えたその人が、食事の途中にちょっと手短かに感謝のスピーチをするのみで、あとは談笑して和やかなひと時を過ごした。

また、かつて家内の日本語の生徒さんの一人であったT女史は77歳になるが、幼稚園の保育を定年退職してから、趣味の陶器を教えたり、数件の貸家の管理をしたりして、悠々自適の生活をしている。土曜日の夕方に私ども一家三人と、彼女の友達一人がチューリッヒ湖の対岸にある自宅に招かれ、手料理のごちそうをして頂いた。ひざ関節症による痛みもあるはずであるがその痛みを余り表に出さず、人生を楽しんでいる姿には頭が下がる。

時の経過と、支えられ生かされていること

こうして、100年祭、10回忌、色々の人々の誕生日パーティーなど、時の経過を思い起こさせる行事の数々に参加して、人生は長いとも短いとも思う。

日本では誕生日や還暦の祝などは、家族、友人、弟子など周りのものが計画し、本人を祝福するのが一般的であると思うが、こちらでは考え方が全く逆であることに気がついた。人間はたった一人で生まれ、たった一人で死んで行くものであるが、今ここに存在している自分は周囲からの支えでもって生かされている。それを周囲に感謝するという気持ちと、また、日常において親しく信頼をもって交遊している人々に、今年も年を重ねることができたことを共に祝ってもらおうという意味で、誕生日や還暦などという区切りに、当の本人が親しい人を招待するのは理にあっていと思う。

この世に生を受けたことは誠に不思議なことであると、このごろつくづく思う。長く生活を共にしてきた近親を失ったり、多感な青春の貴重な日々を共にした友が逝ったりする度にそれを思う。ある区切りをつけて亡くなった人を偲び、その人に近かった人々が集まり旧交を温めるのが、回忌あるいは追悼祭である。それは、洋の東西で形こそ若干違い、残されたものにとって大いに意味をもつものだと考える。（了）

Akademische
Gedenkfeier
zum 10. Todestag von
Professor Hugo
Krayenbühl

